
落とし穴から始まる異世界譚

ドラグーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落とし穴から始まる異世界譚

【Nコード】

N2778Z

【作者名】

ドラグーン

【あらすじ】

都内某所の高校に通う天野光春は補習回避のため、山積していた宿題を一分一秒でも早くやらなければならず、近道の薄暗い道を走っていたら、落とし穴に落ちて異世界に来てしまった。彼の明日はどっちだ。チートなし、ハーレムなし、主人公たちの妄想をぶち抜きます。強大な帝国から彼を召喚した王国を救うため頑張る予定です。

第一話 ・ ・ Where is here? ・ ・

「やりました、成功です！」

彼の耳にふとこんな声が聞こえた。声の主はおそらく女性であろう。しかし、なんだか確証が持てない。何故ならば彼――天野光春の意識ははつきりしていないからだ。そんな中で思い出してみた。自分の周りに人が居たのかを。

徐々に脳の中の霧が晴れてくる。答えはノーだ。彼がいたはずの場所は人通りがきわめて少ない、薄暗くて狭い建物の間の小道だった。そんなところを通った理由は、さっさと家に帰るためである。課題をやらなければならなかったのだ。

これだけ聞けば、彼は真面目な学生なのだろうかと思ってしまいかもしれない。本当のところは、数学の溜まっていた宿題を明日までに全て出さないと快適な夏休みを過ごせなくなってしまうからである。中間試験の数学の点数は、高校に入ってからそうそう酷いモノだった。期末試験の範囲も彼にはさっぱり理解ができない。だから内申点で稼いで補習を回避しようと考えたのだった。

日本語にはとても聞こえない話を延々と聞かされるのは彼としても勘弁であり、そうなるくらいだったら、今日くらいは勉強に励もうと思っていた。一分一秒でも長く時間をとるため、普段の帰路とは異なる近道を通ったのである。

現在の自分の周囲を眺めてみると、頭上のガラス窓から明るい陽射しが射している。先にも述べたが、光春のいた場所は薄暗い屋外である。下を見る。きっちり詰まった石畳の地面には魔法陣が白い

何かで描かれていた。二重の円の中に五芒星、円と円の間には定番のルーン文字らしき何か。そして、上半身を起き上がらせた形となつてゐる彼を囲む5、6人の白衣のような、ローブのような服を着て、歓声を上げている、先ほどの声の主を含めた男女。見るからに白人であり、全員先っぽに赤い玉が付いた木製の長杖を手にしている。

直前の記憶が戻ってくる。鮮やかなまでに落ちたのだ、その見えない真つ黒な落とし穴に。そしてその後の自由落下。地面に着いた衝撃。

このようになった過程は分かつたのだが、納得ができない。そもそも何故見ず知らずの場所にいるのか。下に落ちたのに、真上から溢れんばかりに光と青空が広がっているのか。悩んでいても仕方がない。さつさと帰らなければ、今と似た状況でお勉強という名の拷問を受けなければならない。幸か不幸か、周りの人たちは悪い人には見えない。まあ、彼の直感によるもので、根拠などどこにもないのだが。聞けば親切に答えてくれそうである。

ここで石につまづいた。喜びを炸裂させている人たちは明らかにまでに日本人ではないのだ。白人だ。ひとえに白人といえども、英語を母国語にしている人たちばかりではない。フランス語やドイツ語の人たちだっている。たとえ英語をしゃべっているにしても、彼の英語の成績は数学ほどではないにしても、あまりよくないし、ネイティブ・スピーカーの教師の言っていることやテストのリスニングがまともに聞き取れた覚えがない。

ある程度距離があつたり、声が入り乱れているせいで、本当にどんな言語かが分からない。日本語のような、と頭に浮かんだが、そんな訳ないと勝手な固定概念でその考えを捨てる。ただ、跳ねたり、

笑顔を浮かべているので歓喜していることだけは判断できる。まずは英語で尋ねてみた。

「Excuse me, where is here?」

ここは何処ですか？ という意味のつもりだったが、残念だが違う。正しくは、Where I am? だ。間違いやすいミスではあるのだが。そんな事とは露知らず、心の中で多少得意げになりながら反応を待つ。

「……すみません、何をおっしゃっているのでしょうか?」

柔らかな笑みを湛えて男性の口から放たれたのは、まさかの日本語であった。光春は当然驚いた。日本語に聞こえたのはやはり間違いではなかったようだ。普通に考えれば、ここは日本国内のはずであり、英語が分からない目の前の人たちは日本語が話せるフランス人やドイツ人であるのだろうと考えてみる。だったら、より簡単なことに日本語で尋ねればよい。

「あのですねえ、いきなりですが、ここは何処なんですか?」

少し気兼ねするような感じである彼に対して、先ほどの男性はやはり微笑みながらこちらに向かって来て、光春に手を差し出した。

「ようこそ、ルクシア王国へ。どうぞ」

男性の手を取り、立ち上がった。そこですぐ、後ろにいる人々から拍手が沸き起こった。男性の言ったところからも、どうやら自分は歓迎されているようだと感じた光春なのだが、刹那に気づいた。彼が目をつけるべき点はそこではない。今、目の前の自分よりも背

の高い金髪の男性は何と言った？

「もう一度伺ってよろしいでしょうか？　ここはどちらでしょうか？」

先ほどよりも丁寧に、音程を落ち着かせて尋ねた。しかし戻って来た答えは同じだった。

ここは日本国のはずである。それに彼の知識の範疇だが、ヨーロッパはおろか、世界にそんな国家は存在していないはずなのだ。もしかしたら、面前の彼らは人様の国で勝手に国家を名乗っているのかもしれない。よくよく、来ている服は変だし、魔法使いの如く杖まで持っている。カルト教団の集まりに来てしまったのだろうかとも思案する。

「……何か勘違いをされているようですね。中将殿から伺ったところによれば、あなた様は『ニッポン』という国からいらっしゃったとか。ふむ、ここでは難ですから、別の場所で詳しいお話をしましょう。バートン君は王太子殿下に、セドラン君は中将殿に召喚の成功を報告してくれ。残りの者は速やかに持ち場に戻りなさい」

この男性はこの場のまとめ役なのか、喜んでいる各員に手早く指示を発していく。報告に向かうよう命令された男女は返事をしてから背後の扉を開いて去り、他の人々もさっさと散って行く。その場に残されたのは二人だけになった。改めて見直してみると、かなり広い部屋だ。それにしても、なぜ彼は自分が勘違いしていると分かったのか。光春の顔に書かれた文字を読み取ったのだろう。

「改めまして自己紹介をさせて頂きましよう。サミュエル・ボールドウィン、王立魔法研究局第七課課長の職を賜っております。どう

ぞお見知りおきを」

ボールドウィンと名乗る彼は軽く会釈した。光春は第一印象として学者然としたものを感じた。彼の服装や述べたところの役職からではなく、何となくお堅い感じをしているのを感じ取ったのだ。角ぶちメガネでもかけていれば、それはもうインテリな大学教授にか見えない。ちなみに理系の。

やはり考えが別の行先へ向かってしまう。彼が着目すべき点はそんなことではやっぱりない。『ニッポン（発音が違う）という国いらっしやったとか』、『召喚』、『魔法』。ここである。彼は海の底から何かが浮き上がってくるような、そんな感覚がしたが、まだそれは手にとれる位置まで達していない。詳しい話をしてくれるそうだ。光春は名前だけ名乗ってから、ボールドウィンの案内するまに着いて行った。

第二話 異世界

扉の外の光景に光春は少し目を奪われた。華美な模様が描かれているわけではないが、ワックスでもかけられたかのようにピカピカ輝いている大理石の廊下と精巧な彫刻がほどこされた壁面が抑えていてもあふれ出る高級感を演出していた。しかも天上には小振りだが綺麗なガラスのシャンデリアが取り付けられている。ヨーロッパの城かどこかと光春は思った。先ほどの質素な石で出来た部屋とは対照的だ。ドアの外がこのようなになっているとは予想がつかなかった。この美しい廊下は、彼は歩いてもいいのだろうかためらってしまうほど、いや、居ていいのであるうかと思ってしまうほどである。光っているような大理石の廊下を土足で歩けば誰かに怒られてしまうだろうとも彼は思う。

一方、ボールドウィンは気にすることなくどんどん進んでいる。おどおどしている光春に気がついたのか、先ほどと同じく微笑みながら、「豪華かとお思いになるでしょうが、気にする必要はありませんよ」と声をかけた。だが、光春もそんなことを言われたって無理なものは無理である。

そんなこんなで十数分歩くと、途中にある部屋に入ったのだが、そこもやっぱり凄まじかった。金箔の凹凸をつけて彩色した金唐革紙のような壁紙が貼り付けられ、真紅のベルベットの絨毯が床一面に敷き詰められ、その上にマホガニーで出来たテーブルが乗っかっている。それらを温かみのあるランプが照らす。庶民である光春には縁のないはずである部屋だ。一つ一つのものに強烈な個性があるにも関わらず、それぞれが調和していて、全体で一つの芸術品であるように見える。

その部屋には先客がいた。二人はテーブルの傍らにある椅子に座っていた。ボールドウィンは光春に、その向かい側に腰掛けるように言った。応接間のようになっていて、ちょうど四人分の席がある。

「おや、姫殿下がいらっしゃるとは。王太子はどちらへ？」

ボールドウィンは一礼してから、少女に訊ねた。

「あに……コホン、お兄様なら狩りに出かけましたわ」

流れるような長いプラチナブロンドに真つ白な肌、何より真つ赤な目……ではなく青い目。残念ながら、よく登場するアルビノではなかった。服の上からでも分かる胸の大きさはちょうどいい感じだ。光春的には、今まで見た中でももっとも綺麗だと思える自分と同世代くらいの美少女だった。しかし気になる点もある。その外見は、一見すれば西洋人形を彷彿とさせるのだが、何か粗野な感じを与えるのだ。姫と言われるのも見た目だけなら何の違和感もないのだが、奇妙な印象だ。彼にはその理由が分からなかった。

「ご紹介しましょう。こちらにいらっしゃるのは、エミリア・ラヴィニア王女殿下であらせられます。あちらは王立軍特務部第八課指令ハヤト・アリマ中将です」

「エミリアと申します。どうぞよろしく」

彼女はこちらに向かってそう言った。本当に取り繕っているふうにはしか見られない。鳥のさえずりの様な音色の声だ。一方、エミリアの奥にいる日本人と思われる男は何も言葉を発せず、テーブルの上のティーカップを眺めている。それでも日本人がいるということに光春を安心させた。やはりここは日本だったのだと。来ている服

装だつてそうだ。ボールドウィンが着ている服は、まっとうに生活していればまずお目にかかることはないであろう変わった格好である。それこそ、彼は魔法云々と語っていたが、ファンタジー作品で魔法使いが着てそうな姿だ。

しかし他の二人は違う。王女というからには派手な装飾がなされた、かさばるようなドレスを身に着けていそうなものだが、着用しているのはチェックのスカートにベスト、それに女性用の短いネクタイである。男の方もスラックスにワイシャツという格好。どちらも現代的である。だから日本だと勝手に確信した。

「天野光春です。あの、申し訳ないんですけど、ご用件があるなら早くおっしゃっていただけると嬉しいのですが。僕も少し急いでいるので」

「有馬隼人だ。ふむ、薄々気がついてはいると思うのだがね、ここは君のいた平和な先進国ではない。地球ではなく、俗にいう異世界だ。帰ることができる君はそれでも考えるか？」

カップの方から光春の方へと、顔を僅かも動かさず視線だけを向ける。背筋が凍ったような感じがした。鷹の目の如く鋭い眼光は黙って話を聞いて頷いていればいいとでも命令しているのだ。いかめしい外見と低い声も相まって実に恐ろしい。こんな感じの人に商品売りつけられて大損したという話を聞いたが、当時は愚かで情けないと思ったものだ。今なら分かる。本気で殺されそうな雰囲気だ。言葉が出てこない。喉のまえで突っかかっているどころか、反論を生み出す脳自体がコンクリートで無理やり固められたようだ。

「論より証拠、百聞は一見にしかずという。プリンセス、どうかお願いしたい」

「ええ、了承しました。容易いご用ですわ」

エミリアは光春の手前で手のひらを出す。すると、そのすぐ上に火の玉が現れたのだった。光春が驚いたのを確認すると、彼女は得意げな笑みを浮かべて手を握った。それと同時に火も消えた。

「『魔法』だ。本物のな。君にこれが証明できるかな？ こんなもの見せなくとも、底の見えない落とし穴に落ちたら室内にいました、なんてことがあるわけなかりうに。君は召喚されたのだ。この国を救うために」

有馬の述べる話をまとめると、ここはテラスペムという地球とは別の世界にあるルクシア王国。文明体系は中世ヨーロッパレベルだが『魔法』が基幹技術となっている。これは一部の人間しか使用できないが、彼らが特権階級と化すことはない。曰く、現国王も使えないとのこと。詳細はまた後日。

王国は、三年前より急速な拡大を続けるゼーランド帝国がいよいよ西の隣国を挟んだところまで迫ってきた結果、防衛策をとらざるをえなくなった。志願制だった徴兵制度を義務化したり、他国と相互防衛条約締結するなど対策を講じてきたが心もとない。そこで、異世界から将来的に強力な魔法使い―ウィザードになり得る者を機械的に判断し呼び出す『跳躍召喚』を発動。光春を含めて十三人が召喚された。衣食住は王国が保証するが、訓練を怠った場合はその限りではない。身分階級もあり、モンスターも存在する。以上だ。

光春が思うことは勝手すぎるの一言に尽きる。人の意思を無視して、知らない世界で戦争の道具になれという。あまりにも理不尽。

「……学校はどうすればいいんですか？ 家族とか友達とかは！？ 僕に知らない国のために死ねとおっしゃるんですか！？ そんなのあんまりだ！ 魔法？ 異世界？ ふざけんな！ あんたらインチキカルトに付き合ってる暇はないんだよ！！ さっさと家へ帰せ！！」

光春は声を荒げた。テーブルを拳で叩きつける。こんなにもなったことはいつ以来だろうか。何も考える必要のなかった小学生の頃以来か。ボールドウインは気の毒そうにしているし、エミリアも申し訳なさそうに彼から目を背けている。しかし有馬は違う。再び瞳はカップの下へ向かった。そこまではいいのだが、代わりにホルスターのようなものから真っ黒な拳銃を取り出し、腕を伸ばして無言でそれを光春の額に当てる。そのまま撃鉄を起こした。

「信じられないしそうしたくないのも分かる。だがな、いずれこうなつてよかったと思うだろうよ。黙って言うとおりにしておけ。……もしこのまま駄々をこねるようなら、さてどうなるかな？」

光春は包丁で体を刺されたのかと錯覚する。刃向う力を奪われる。銃のシリンダーには金色のマグナム弾が装てんされている。弾の種類など光春には分からないが、本物であることは全身で理解できた。ボタンと椅子に尻をつく。何でこんなものを所持しているのかという疑問も浮かばない。この後は有馬が口にする数々の誓約にただうなづくことしかできなかった。

見たこともないような言語で記された書類にボールペンでサイン

をするよう強要され、エミリアに連れられて部屋を出た光春であった。

先ほどの大理石の廊下の続きを歩いていた。窓からは青々と茂る深い森とその先の山脈までを見渡すことができる。ここが異世界だとはとても納得できないが、心の何処かでは悟っているのかもしれない。冗談だと思っていたら、あんなみっともない行為はしない。ただ茫然と長く冷たい廊下を進み続けた。

第三話 スタート地点

光春には異世界に来たということが信じられなかった。そんなことをすぐに飲み込めてしまう方が不自然だろう。たった十六年とはいえ、彼が今まで築き従ってきた価値観が崩れてしまったかもしれないのだ。部屋を出てから、うつむきながら歩いては、時々窓の外を眺めるといふことの繰り返しだ。彼を案内しているエミリアとは口をきいていない。進んでいる廊下は出口のない果てしないものに見える。静寂に包まれた冷たい廊下は時間が止まっているかのようを感じられた。

窓の外に広がっているのは特段異世界だと確信できるものではなかった。ただっ広い森の先には、行くものを阻む壁のように連なる白い山脈があった。日本では見られない風景だろうが、浩々たる地球ならばどこかで目にすることができらるだろう。

「ご迷惑をおかけしているというのは重々承知です。あなたには大変申し訳ないと思っています。ですから、我々も出来る限り、ご不便をおかけしないつもりであります。ですから……」

エミリアが光春の方へ振り返り言った。彼女は心から詫びているように思う。思うとしたのは、彼がエミリアの顔を見ようとはしなかったため、声色でしか判断できなかったからだ。もしかしたら彼女はへらへらと笑っているのかもしれない。まあ、実際は至極真剣なものであったが。

彼らだって悪気はないのだろう。彼は仮にここが異世界であると自分に前置きしてから考えた。強大な帝国が自分たちの国を滅ぼそうとやってくる。対抗する手立ては異世界からの召喚ただ一つ。や

むを得なかったのだろう。召喚されたものは努力を怠ったとき以外は、能う限りの待遇で迎えられる。魔法というおとぎ話の中でしか登場しないようなものまでである。世界がつまらなく思える人にはきつとうつてつけだろう。彼とて満足しているわけではない。むしろ不満である。

では何が彼をこういう気持ちにさせるのかといえば、家族の事だろう。ここで友人が―と述べる人もいるのかもしれないが、基本は他人だ。初めは心配するのかもしれないが、しばらくすれば彼らの記憶のピースに過ぎなくなる。数ある出来事の一つとして埋もれてしまうのが関の山だ。それでも気にかけてくれそうな人はいるが、その一人である小学校からの友人は先月に忽然と姿を消し、幼馴染は両親の都合でアメリカにいる。どちらも事情を把握することはできないに違いない。

親と言うのは何を言っても肉親なのだ。罵り合っても、長い間話さなくともきつと心配するだろう。普段から気にすることはないのだが、こういう訳が、今に限ってとても気になるのだ。

「あんたらに何がわかるんだよ。人の気も知らないくせに……」

光春はボソツと呟いた。彼女に面と向かって言えない自分が嫌になる。彼はまた彼女が謝罪の言葉を繰り返すだろうと思っていたのだが、聞こえてきたのは舌打ちだった。

「あーあ、やめやめ。慣れねえことはするもんじゃないなあ。言いたいことがあるならしっかり目を見て話せよ。それぐらい習わなかったか、おい？」

その後が続いた言葉は信じられないものだったが、とても自然な

ものでもあった。エミリアは光春の下を向いていた顔を掴むと、強引に持ち上げた。そこにあるのは当然彼女の顔なのだが、先ほどの気品ある感じからは程遠いが、それでいて人をひきつけそうな感じをあたえる目鼻立ちだった。

「あのねえ、信じられないのはわかるし、あたしたちも申し訳ないとは思ってるけど、そんなんじゃこの世界ではやってけないぞ。そうだ、ついて来て」

彼女がそう言ったところで、通路が二手に分かれている。まっすぐ行った先はそのままさらに道が続き、右手に行った方にはすぐ白い両開きの扉があった。エミリアは右に曲がると、光春もその通りにした。扉の前に着くと、エミリアはドアをボタンと開けた。その先はバルコニーになっている。そこから流れるやや冷たい風が体に吹き付ける。

ここは高台にあるのか、そこからは森とその先にある中世ヨーロッパ風の石造りの建物が整然と軒を連ねている様子を一望できた。そして、街を囲う城壁らしきものの外部は地平線の彼方まで青い草原が広がっているのも見晴らせる。今しがた窓から見た情景ともども、光春は自分の住む国では見ることは出来まいと思っていたのだが、地平線の上の空に浮かんでいたそれにはつい腰を抜かしてしまった。それは絶対に日本では、いや、地球上どこに居ようが決して望むことのできない情景だった。おそらくエミリアは、自分が未だに異世界に来ていないと自分に言い聞かせているということを察してここに連れてきたのだろう。彼女の狙いは当たりだ。彼は、寝ぼけているときに辛口ガムを無理やり口の中に含まされたようにはつきりと目が覚めた。

「有馬から聞いたけど、あんたたちが居た世界は衛星が一つしかない

いんでしょう？ この世界には三つあるんだ。あれをまとめて月って言っんだ」

オリオン座の三つ星よろしく、同じほどの大きさの真ん丸い月が斜めに並んでいる。それだけならまだしも、地球の衛星よりもそれ自体のサイズが巨大なのか、より近くにあるのかはする術がないものの、青い空の四分の一程度を占めている。クレーターもありありと見受けられる。

「きれいだと思わないかな？ もうわかってると思うけど、あんたをここに連れてきたのはこっちに來たって決定的な証拠を見せるため。偉そうで悪いけど。……気づいてないみたいだから教えてあげる。感謝しなさい。異世界に來たとは言ったけど、帰れないなんて誰も一言も言ってないぞ」

エミリアはくるりと回って光春の方を向いてから言った。彼女の顔はニヤリとして礼の言葉を求めているようだった。先ほどの厳つい男との会話を思い出してみる。『君は帰れると思うか？』というニュアンスの事を聞かれたが、そういうえば『帰れないから諦める』という感じの発言は出てこなかった。

「じゃあすぐ帰れるのかい？」

そう尋ねると、彼女はこれ以上ないというくらいの笑みを浮かべていった。

「うん無理」

かわいらしく、舌を出してそう言った。光春もつい彼女に心がなびいてしまいそうだった。内容を除けばの話だが。彼自身もおおよ

そ認識できたのだが、顔には不愉快そうな表情が出ていたのだろう。彼女は目を閉じて、先ほどとは対称的な落ち着いた口調で述べた。

「無理だけど、たぶんアンタは元の世界に戻る。あの野郎、アリマは親父の信頼を得てみたいけど、どうにも怪しいの。根拠は勘だけど。でも絶対にこれは当たってる。あの男も方法までは知らないかもしれないけど」

自信ありげな感じである。不満が口を衝いて出そうになるが、出てこない。彼女とは限らず、このような臆することのない態度を目前にすると、光春はついついそれに従っていればよいという気持ちになってしまうのだ。ましてや、眼前の人物は飛び切りの美少女なのである。運命の女神フォルトゥーナが微笑んでいるかのような、とにかく自分は黙って従ってればよさそうである。

しかし、彼の心には正反対の想念が浮かんでくる。彼は数字ではもはや換算不能な、ただ遠いという概念しか説明できないような場所まで来たのである。今までの自分の本質を変えようと努力してもいいはず、しなければならぬ。小学校の成績表に教員の意見を書き込む欄があった。そこには「天野君は自主性が足りないので、もっと自分の意見を持つように心がけてください」と書かれていたことを思い出した。殻を破るのにはちょうど良い、むしろ遅すぎたほどかもしれない。思い切って自分の意見を口に出すことにした。

「君から見たら気楽でいいかもしれない。でも僕から見たらこれとはとても重大な問題なんだ。遊び半分な気分でそんな無責任なことを言っただけじゃない」

「わかってる。自分の身に置き換えたらって思うと、アンタの心情はわからないけど、少なくとも面白半分で慰めの言葉や希望を持た

せるようなこと言ってほしくないっていうのは理解できる。今まで
の人間関係はともかくとして、自分の意にそぐわないことをされて、
強制されて、その元凶みたいなのやつにそんなこと抜かされたらなん
てむかつくもん。そこで改めて言うことにする。どうか協力させて
ほしい、そして協力してほしいの。貴方が元の居た場所に帰ること
に。この国を守ることに。あたしを信じろとは言わない、信じるに
値するかどうか見極めて欲しい」

光春は驚いた。彼女の言葉は機関銃のように自動的に口から発せ
られ続けるのだ。それでいて、適切に区切っていて耳に心地いい。
聴衆を前にした演説家とはいかないまでも、彼にやはりその通りに
すべきだと思わせた。言葉は多数に向いているような感じを受けた
が、目は有言実行と言わんばかりに彼だけを見ていた。彼女の碧眼
はまさに海だ。青く深い。深海から魅入られているような、強い意
志が見て取れた。

「天野光春っていうんだ。高校二年生。この世界に高校があるかは
知らないけど。よろしく」

彼の口はふとこんなことを言った。先刻はまともな挨拶をしてい
なかったからであろうか。

「エミリア・ラヴィニア・モントローズ」ローランドっていうんだ。
一応この国の王女をやってる。こちらこそ、良い友達になれると嬉
しいな」

彼女は手を差し出してきたので、光春もそれに応じた。彼女の手
は温かく、温度が体にしみわたってくるようだ。ついでに彼女の握
る力は想像通り強かったので、痛みまでこちらに伝わって来たが、
黙っていることができた。細い腕のどこからこんな力が出て来るの

か想像できなかったが、少なくとも後ほど知ることになる法則とは関係ないようである。

第四話 地平の彼方へ

自分の部屋よりも高く、黄ばみの一つもない白い天井を見入る。エミリアは光春の顔に疲れの色が出ているのを察したのか、召喚された者のためにあらかじめ用意された部屋でひとまず休むように勧めた。だからこうして、誰かに抱かれているように力を自然と任せられるようなやはり白いベッドに手足を投げ出し、息をついているのだ。すると、すぐにまぶたが重くなってくるのを感じるのだった。

雑音の一つもない。目につく家具と言えば、ソファとテーブルにキャビネット、彼の背ほどはありそうな木製の振り子時計、煤の破片すらない新品同然のレンガの暖炉くらいしかなく、ビジネスホテルを想起させる簡素さである。よって、ただでさえ広い部屋が途方もなく大きく思える。申し訳程度の模様しか描かれていない壁紙は天井と同様の白色にしか見えない。白と言う色は膨張色なので、広く感じるのはなおさらのことだ。

広大無辺な大空に浮かんでいる雲の上にも寝ているような錯覚を受ける。彼の体重は肉体的精神的疲労ともどもマットレスの中へ消えていく。目の前がぼやけて始める。この白い空間に溶け込み、同化していくかのようなのである。彼はそのまま眠りについてしまった。

彼はハッとして飛び起きた。いつもの夢のせいである。いつもと言っても内容は異なるわけだが、何となしに似た印象を受けるのだ。大体が碌でもないような悪夢同然の代物であり、脳が作り出したた

だの映像とは思えないほど不気味なまでに生々しい。焦げるにおいても弾力のある何かを踏んだ感触は起きた後も鼻に足に残るのだ。今し方目にしたのは、学校の教室の様な場所で裾の丈が膝を越すほど長く青いコートを身にまとった光春と同世代くらいの少年が、やはり同じくらいで黒いミディアムヘアをした少女―見かけはエミリアそっくりだった―が対峙していて、自分はそこにいる生徒Aとして眺めているところだった。前の二人は妙に大人びた感じを与えている。

特徴的なのは、相対している少年と少女とその他生徒の格好が違う点、少女の背後には散弾銃を構え、黒いジャケットを着用した大柄の男たちが五、六人並んでいる所だった。少年が何かを言おうとした時に耳を聳するほどの音が響いて、世界が反転して夢が終わった。やはり殺伐とした冷たい空気が心に残留する。

ベッドの傍のテーブルには内側に水滴が付いているガラスのカバーで覆われた皿の上のビスケット数枚とコーヒー、そしてその外に手紙が置いてあった。固いソファに腰を掛けて、コップを手取る人の肌より少し暖かい程度の温度がほどよく、砂糖とミルクが付属していることに感謝を覚える。いつからここに置かれていたのか、部屋に入ってきたときにはなかったから寝ている間だろう。そちらの方が気になって、コーヒーが何故冷たくなっていないことや暖房も付いていないのに温暖であることに気がつかなかった。

コーヒーを飲むにつれて頭が冴えてくる。異世界にまで追ってくる夢の事に着いてまだ考えていた。この間見た夢は彼の父とその上司と思われる外国人が話している場面だった。目まぐるしく動く人々、父の職場だろう。外国人の方だが、はて、いつか見かけたような覚えがあるのだ。

夢のことを思いだすより先にすべきことが彼にはあった。今後の方針についてだ。何故自分はこの世界に呼び出されたのか、スオー・ウォーズの銀河帝国バリという国家と戦うための手段として、ありふれたファンタジーよろしく召喚されたわけだ。それについてはいいでしょう。問題は、召喚される人物は将来的に期待できる『かもしれない』者が選ばれると聞いたことだ。断定してはいないというのは、ただの人間の場合もあるのだろう。さすがに素っ裸で戦場に放り込まれはしないが、この国は役に立たない人間を扶養するかどうかということだ。

しけてしまったビスケットを一枚かじる。アイスの間にこれに似たようなものが挟まれている商品があり、彼はその食感がなかなか好きであったのだが、どうもいただけない。混ぜてあるチーズの味が気持ち悪いと感じた。アイスやクリームとは言わずせめて牛乳でもあればいいのだが、小振りのミルクピッチャーを空にしてしまった。しょうがないので砂糖をつけて食べることにした。

エミリア姫は王女らしいかと問われればともかく、義理堅そうに思われるが、彼女に役立たずを処理する権限はあるのだろうか。ここで誰が決めるようが結果を変えることができないことに気づく。上手くして取り入れればいいのか、光春にはそのための技量も金もない。だが、彼はどうにかして生き延びねばならない。エミリアがカギだと語る有馬隼人がしつぽを出すそのときまで。別に何のためだとか誰のためだとかいう訳ではなく、単にこんなところで犬死するのが嫌なだけである。

さてここで手紙を読むことにした。内容はいたって簡潔であり、朝五時―時計の見方は地球と変わらないらしい―までには起きているとのことである。ご丁寧にも日本語で記されていたが、署名はなかった。だが差出人には大体目星がつく。

ゆつくりと立ち上がった窓を開けると、冷たい風が吹き込んでき、両側に吊るしてあるカーテンがふわふわとなびいたのだった。外には三つで一つの月が空を支配しているみたいに漆黒の夜空に輝き、他の星がそうするのを邪魔しているようだ。別の星が見たいのならば、こちらとは反対側の山脈が連なっている方に行くしかない。

月の下には黄金の光で照らされて、一面ライトグリーンに映る平原がバルコニーで見たときと同様に広がっている。光春は漠としてあの彼方には何があるのだろうか、などということを思う。そうしたら、何故かこの世界がとても興味深いもののように感じられた。幼いころ父に千葉東部の海岸に連れて行ってもらったことがあり、広大な太平洋についてもふと同様の感想を抱いたのだったが、その先にはアメリカ大陸があるとは皆が知っていたし、自分も理解していたことを思いだした。

しかし、あの地平線の果てには何があるのか、少なくとも自分は知らない。そう思うと面白く思えてくるのだ。そうだ、RPGを自分でやっているとするばいい、自分はコロンブスなのだ！が、その通りだとモンスターという人外の化け物もいるということだ。温まりかけた体が流れ込んでくる空気も相まって、冷えていく。

（でもでも、悪い帝国と戦うということは、並み居るモンスターを蹴散らせるような力も手に入るってわけだ。何も問題ない。ノープロブレムだ！）

ネットに落ちている小説でも、彼と同じ世代の高校生たちが知らぬ世界で獅子奮迅の勢いで敵をなぎ倒しているのではないかと思えば心配ない、と彼は自分自身を慰めた。不安材料がないと判断するにはいささか、いや、途方もなく弱い考え方だったが、懸案を吹き飛

ばすのには十分だった。彼は今となって高揚し、胸の内はどんな魔法があるのやら、モンスターはどうだとかで満たされていたのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2778z/>

落とし穴から始まる異世界譚

2011年12月25日15時54分発行